

記憶から

榊田 正子

幼稚園で日々子どもと生活を共にできる立場を与えられてから、丁度一年が過ぎた。四十年以上も前に自分自身が遊び育った幼稚園の同じ園舎である。

この一年私は、目の前で生き生きと動き生活している子ども達と自分との関わりを考えつつ、同時に、数十年前私自身はこの園舎でどんな風に一日を過ごしていたのだろうと考えることが度々あった。これまで長い間別の職場に居て、保育者として直接

子どもと関わることにブランクがあることを少なからず焦りに感じている私は、現在の子どもの関わりを体験すると同時に、自分の中にあるもうひとつの保育の感覚を探し求めて引っ張ってくることによって、そのブランクがいくらかなりとも埋められるかもしれないという、漠然とした期待を持っているのかもしれない。



しかし残念なことにそうやって記憶をたぐり寄せ
てはみても、厳密にこの園舎の中での自分の姿とし
ていつもはつきりと思い出されるのは、二つの場面
だけである。その一つは、遊戯室の脇の狭い廊下
で、そこに置いてあるコート掛けに背中を当ててい
る私の姿である。コート掛けが子どもに扱い易い高
さであるし衣類を掛けるフックも出っ張っていて、
それにもたれかかることは、多少首と背中を前に丸
めなければならず背に当たる面も平らではない。し
かしそんな前かがみの姿勢の感覚とそこでそうして
いることの落ちついた感じとが、何故か結構はつき
りと思い出されるのである。一人でそこに居るので
はなく仲間と遊んではいるのだが、何をしているの
かは思い出せない。もう一つの記憶は、玄関から遊
戯室まで続く廊下で、担任の先生が他の先生（当時
の主任先生であったような気もするし、他のクラス
の担任の先生であったような気もする）と何か話し
ておられ、その傍らに居る私である。二人の先生が

私に語りかけているのでもなく、また私が二人のお
となの顔を見上げたり話をきいているのでもない。
多分二人の先生の話は私とは無関係のことなのだろ
うが、私がそこにそうしていることを二人のおとな
が認め受け容れてくれているという極く自然な落ち
つきとあたたかさとを、私を含めた三人の位置関係
と廊下の薄暗さの感覚と共に覚えていた。

幼稚園生活の思い出が、このようにとらえようも
ない場面たった二つというのは、何とも期待外れの
感もあるが、戦後の生活の大変な時期で送り迎えな
どもままならなかったのであろう、休みがちの幼稚
園生活であったようなのでそんな関係もあるのかも
しれない。それはともかく、幼稚園と結びついた記
憶はそれだけであるが、子どもの頃の記憶はこれに
続いて次々と出てくる。自宅の応接間にあった背も
たれの大きい二つの籐椅子を向かい合せに内向きに
倒して、背もたれに囲まれた狭い空間の中で背中を
丸め縮こまって本を見ている私、二つの椅子が作り

出す隙間の大きさを工夫しながらはって出入りしている姿。小学校の体育館の裏の使われていない足洗い場の中で、友だちと一緒におしろい花の実をつぶしている私。我家の玄関脇の、丁度ひと一人が姿を隠すことができるような建物の窪み（この窪みを含めた立派でもない玄関のたたずまいを私は何故かとても気に入っていた）を、学校から帰宅して、ああいい場所だと毎日のことながら確認してホッとするとその感じ。毎夏家族と共に滞在していたお寺の離れの裏窓から見える、隣家の緑の芝庭と窓下の可憐なピンクのなでしこの花等々、無理に思い出すまでもなく、次から次へと心地よい思いと共に浮かんでくる。

面白いことに、幼稚園の二つの場面を含めて、次々と蘇る子ども時代の私の記憶は、場所（空間）に関するものが多い。ある特定の場所で独特の姿勢——それは多分その場での私に最も居心地のよい安定した姿勢なのだろう——をとっている自分であったり、ある場での位置関係や視野の中の位置構成、明るさ、色彩、におい等であったりという具合である。場所を伴った記憶が多いというこの傾向が私自身の何に由来するのかが別問題として、記憶に残っているような場面で、その空間が持っている様々な味わいを子どもでもある私が心地よいものとして受けとめ味わっていたことは確かなことであろう。つまり夫々の場で、私なりの心地良さを感じることができると、空間的時間的ゆとりや自由さ、また気持ちの上でも十分に安定感が与えられていたのだらうと察することができる。その場でしていた遊びも一緒に居た人達も、そこで心地良さを構成する他の要素と同等に、調和的、統合的に私自身に受けとめられていたのではなからうか。

こんな風に考えていた時、私は最近の二つ体験を思い出してハッとしたり。

天気の良い日であった。年少の女兒が二人園庭に

ごさを敷いて、その上で背中を丸めて絵を描いているのだが、その場所が、花壇の植込みのすぐ脇で、しかも滑り台などの固定遊具のそばなので他の園児の往来も激しく、何とも落ちつかない場所である。実際、ごさは植込みにかかって三分の一ほどぐれ上がり、地面に接している部分もデコボコしているし、他の子どもが横を走って通る度に園庭の砂利がパラパラとござの上や紙の上にも落ちてくる。おとなの私の目からはあまりにも不安定に見えたのと、描いている絵そのものもその場所でもなくともよさそうに思えたので、「Aちゃんたち、お絵かきするなら、もう少し広い場所の方が描き易いかもしれないわよ。お引越しまししょうか」と声をかけた。ところが、一人の女兒が私の声に一瞬顔を上げて私を見たものの、すぐ元の姿勢に戻って下を向いたまま「いい」と素気なく答えたのみであった。もう一人は顔を上げることもしなかった。年少の彼女達にとってクラスの担任でない私はまだ馴染みの薄

い存在であるし、突然の提案には応じにくいのかもしれない、もう一度声をかけてみようかと私は迷ったのだが、下を向いたままの女兒達の様子にとりつくしまのない雰囲気を感じて、心を残しながらも、そのままその場を離れたのである。

もう一つの体験は、落ち葉を焚いて焼き芋をした日のことである。その時大勢の子ども達も焚き火の周囲で手に手にお芋を持ちながら、火の勢いがもう少し落ちてこげすぎない焼き芋ができる状態になったら灰の中にお芋を入れようと待ち構えていた。私も安全を確認しつつ子どもたちと焼き芋の期待を分かち合っていた。突然年長のS夫が走り寄ってきて「ちょっと来て」と言った。S夫は時々仲間の中に入りにくいこともあるが、そんな時も私を求めてくることは殆どない。何だろうといぶかしく思いながら「なあに」と彼の後について行くと、S夫は園庭の隅のジャングルジムに園庭がまっすぐ見える方向から登った。私も続いて登り二人が同じ段で並んだ

時、S夫は手に持っていたお芋を私に見せて「ほく、これ焼き芋にするの」と言った。皆が持っているお芋とどこと違って変わらないお芋であるし、何故こんな所まで私を連れて来てそれを言ったのだろう、と私はS夫の気持ちが充分理解できなかった。だがもしかしたら、何らかの事情で心が不安定になつてその場に居た私によりどころを求めたのかも知れない、それならばその心は汲んであげたい、という思いが強くなって、なるべくS夫の気持ちに沿うように言葉を返した。しかし焼き火の周囲の安全管理（他の職員もついてはいたが）も私の心から離れなかつたので、すぐに「じゃあそろそろお芋が入れるか一緒に見に行きましようか」とジャンブルジムから降りることを提案し、S夫との関係を保つことを配慮しながら手をつないで焼き火のそばに戻った。皆の居る所まで来ると、S夫は私の手を離して仲間の中に走り込んでいった。

この二つの体験を自分自身の古い記憶と関連して

想起した時、私は子どもと関わりうとする時の自分の姿勢が一面的になりがちであることに気づいて、ハッとしたのである。

すなわち、ごさの上で絵を描いていた年少女兒の例で、私は子どもがしている絵を描くという行動の部分だけを切り離して、その都合良さを考えていた。しかもその都合良さは私の基準でもある。またS夫との関わりでは、その場面の中で私とS夫との関係だけを取り出して配慮している。いずれの場合も、今その場所でそうしようとしている子どもの、その存在を私の中に受けとめてみるということにおいて、充分ではなかつたように思われる。保育においては、ある場面の中からある側面に焦点をあてる必要がある場合もあるかもしれない。しかしそれも、子どもの存在が幅広く豊かに受けとめられた上で意味を持つものにちがいない。

（お茶の水女子大学附属幼稚園教頭）